

# いのちの水

二〇一四年

五月号

六三八号

聖書(旧約)は、わたし(キリスト)について証しをするものだ。  
(ヨハネ5の39)

## 目次

・芽生えの季節	1
・復活のイエスと出会う	使
・徒言行録、パウロ書簡	2
・共に祈ることの重要性	6
・約束の地を受け継ぐ	9
詩篇 37篇	9
・憲法9条をノーベル平和賞	17
に	
・「歴史を知らないこと」	18
への韓国読者からの返信	
・便利さと危険性	20
・ことは、編集だより	21
・お知らせ	23



## 芽生えの季節

春になって山道を歩くと、至る所で野草たちが芽を出し、あるいは花を咲かせ、木々は新芽を次々と出していく。(・)

(・) わが家付近の山麓の道を少し歩くだけで、つぎのような野草に出会う。

ハコベ、セイヨウタンポポ、カモシゲサ、コナスビ、コバノタツチミ(小葉の立浪)、ヒメコバンソウ、カラスノエンドウ、スズメノエンドウ、キツネアザミ、ヤブジラミ、クサイ(草薺)、トウバナ(塔花)、マンネンゲサ、金鳳花、マツバウンラン、ハハコグサ(母子草) 等等。

そして、ベニシダ、ヤブソテツ、イノデ、コシダ、ノキシノブ、ホラシノブ、タチシノブ、イノモトソウ... などなどのシダ類も新しい芽を出している。

樹木も、梅や桜の咲いたあとに、フジの花や見事にその藤色の房を咲かせ、それが終わ

るとモチツツジが山道に花開く。

白い可憐な星のような花を咲かせるマルバウツギも谷筋の湿ったところで静かに花を開いている。

そのほかの樹木もいつせいに芽吹いてくる。

注意深く見つめると、そこには驚くべき命がある。いつせいに春の暖かさに目覚めて、新しくされていく姿がある。無言にして、いのちの大合唱ともいべきものを感じる。

大地を揺り動かすこともできない無限の力を持っている神であるゆえに、このような数知

れない野草や樹木たちをいつせいに芽吹かせ、花咲かせ、成長させていくことができるのである。

このような神の新しくする力は、なんと生き生きと自然の世界に働いていることだろう。人間世界をふりかえるとき、そのような生き生きした神の力が見られない。かえって悪の力が至るところに働いているのを見る。

自然の世界は、清く、美しくしかもいのちあふれている。

だが、人間世界は、逆に醜く汚れ、かつフレッシュな命は見当たらない。

けれども、私たちの霊の目が開かれるにつれて、そうした生き生きしたいのちは、人間世界にも働いているのがわかってくる。ただし人間には、霊的な存在であり、植物や動物と根本的に異なっている。

霊的な芽吹き、成長、そして花を咲かせることは、植物たちのように、ひとりだけで春が来たからぐんぐんひとりだけで現れてくるのではない。

霊的な芽吹き、転換、成長と

いうことは、人間の側で日々求めていかねば、その神の力は働かないようになっていく。植物や動物の世界には、善悪はない。

しかし、人間の世界にはそれが存在し、決定的な役割を果たす。真実な神に絶えず立ち返ることが人間にとっての善きことであり、神に逆らい背を向けて生きることが、悪しきことである。

神に心を常に向けていることによつて、私たちは植物たちが自然に成長していくように、霊的に芽吹き、また成長して花を咲かせ実を結ばせるようになる。

神(キリスト)に背を向けているなら、主イエスが言われたように、そのような人は、「枝のように外に投げ捨てられる。そして枯れる。」

(ヨハネ15の6)

神の息の一吹きによつて、悪の力にて滅びかけていたもの

も、そのいのちを受け取り、芽を出しはじめる。

使徒パウロがそうであった。神の霊的な光が彼の魂に射しこみ、それによつて新たな芽がえが生じた。新生のパウロである。

そして、自然の世界は、春が圧倒的に新たないのちを感じさせるのに対し、秋から冬は、そのように薄れ眠ったようになっていく。しかし、人間の魂の世界においては、日々新たないのちを受け取ることができるし、そのようにいのちのただ中を生きていくことができるように造られている。

毎日が、芽生えのときであり、日々新しい成長がなされ、花を咲かせて実を結ぶようになっていく。いわば神の霊的な光と熱を受けて、神の御手によつて育っていくのである。

植物たちが、日々新しくされ、あらたな芽吹きを見せている

ように、キリスト者もまた、霊的な意味でそのようになることができるように創造されている。神がそのように人間を造られているのだから、私たちの魂が砕かれ、神からの力を受けるほどに、そのようになつていくのだと言えよう。



### 復活のイエスと会う

使徒言行録、パウロ書簡において

使徒言行録の最初において、復活したイエスと弟子たちは40日も会つて神の国についていろいろと教えを受けたことが記されている。それにもかかわらず、弟子たちには新たな力は与えられなかった。人間そのものも変えられなかった。

これは意外なことである。復

活したイエスとそれほど長い期間に会つて直接に教えを受けていけば、そこから当然力を受けてキリストの復活を宣べ伝えようとするようになってきたと思われがちだが、そうではなかったのである。

弟子たちの人間そのものが変えられ、部屋にこもつて恐れていたような弱々しい弟子たちが、殺されることをも恐れないほどに力を与えられたのは、聖霊が注がれることによつてであった。聖霊が与えられるということこそ、本当の意味で復活のイエスと出会うということなのである。このことは、とくにヨハネによる福音書においてはつきりと記されている。

：わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻つて来る。

しばらくすると、世はもうわ

たしを見なくなるが、あなたがたはわたしを見る。…心を騒がせるな。おびえるな。

『わたしは去って行くが、また、あなたがたのところへ戻って来る』と言ったのをあなたがたは聞いた。

(ヨハネ福音書14の18〜28より)

このように言われて、聖霊こそが復活のキリストであることを示している。聖霊を受けることが、すなわち復活のキリストに出会うことになる。

他方、復活したイエスが特に個人的に呼びかけることで、イエスのほうから出会いを与えたという例もある。これは、パウロの例において明らかである。彼は、キリスト教そのものを撲滅せんとしてキリスト者を殺すことまでしたと記されている。(使徒22の4)

イエスとの出会いを求めているだけでもなかった。それにもかかわらず、神の一方的の御計画によって、復活のイエス

との出会いが与えられた。

このようなことは特別な人しかない、ということではない。私たちもさまさまの悩みや苦しみ、あるいは悲しみの淵に沈んでいる時に、思いがけず主からの呼びかけ、励まし、その声を聞き、それによって立ち直らせていただく。そのような経験をされた方々も多い。

ヨハネ福音書においては、イエスの内にとどまれ、ということが繰り返し述べられている。イエスの内にとどまろうと願うなら、イエスもその人の内に留まる、ということが、繰り返し強調されている。

(ヨハネ福音書15章10)

それに対して、パウロ書簡では、キリストによって義とされる(罪赦される)こと、そしてキリストがうちに住むという表現に重きが置かれている。キリストと出会う、そのことからさらに進むことは、

キリストがうちに住んでくださることであるからだ。

普通に考えても家のうちに共に住んでいるなら、当然毎日会っていることになる。イエスがうちに住んでくださるときには、私たちは当然イエスと毎日日常時合っていることになる。

・主の内にあつて *in the Lord*  
この表現は、パウロは非常に多く用いている。

だからこそ、パウロは、「主にあつて」「キリストにあつて」(\*) (*in Christ*) または、*en Christ*) という表現を、ほかのいかなる使徒や文書より、圧倒的に多く使っている。

(\*) この言葉は、新共同訳では初めて「主と結びついて」と訳されたが、原語のニュアンスは、「主の内にあつて」という意味。

「主にあつて」という原文は、*en Kyriou en Christu*

であるが、この表現は、コンピュータで検索すると新約聖書全体で四十七回現れる。しかしそのうち、四十六回までパウロの書いた文書に使われている。また、「キリストにあつて」という表現も新約聖書では七十六回あるが、そのうち、七十三回までパウロが使っている。すなわち、こうした表現は、パウロに特有なのである。

その他、キリストのことを代名詞を用いて「彼にあつて」などとなっている箇所も合わせると、新約聖書全体では、パウロは、このような表現をダイスマン(\*) によれば、百六十四回も使っている。

(\*) ルドルフ・ダイスマン (1886〜1937) ドイツの神学者、彼の著作「パウロの研究」(邦訳は1986年教文館刊)の199頁

さらに、パウロ書簡では、義とされる、ということが重要。

義とされるとは、英語訳では、*justly* であり、これは、罪が赦されるという意味で用いられる。

パウロは復活のイエスと突然出会った。彼においては、罪の赦しと同時に出会いが与えられた。パウロは、イエスと出会い、言葉をかけられたときに、彼の罪深さを知らされ、それにもかかわらず罪赦されたのを実感した。彼が3日の間、目が見えなくされ、水も食事もとらなかつた。それは、自分の罪深さ、傲慢さと、それにもかかわらず、それを罰するのでなく、一方的にその重い罪を赦し、語りかけてくださったキリストの愛を深く受け止めるため、祈りに専念するためであった。(使徒言行録9の9~10)

このように、パウロは、十字架のキリストによるあがないを信じたから赦されたのでなく、その信仰をまだ知らない

とき、迫害のさなかに一方的に主からの赦しを受けたのである。

そして、後になってイエスの死の意味が啓示され、その死は万人の罪を担って死なれたのだと悟るようになった。

主は、アナニアという弟子を呼び出し、彼を用いて、パウロの目が見えるようになり、聖霊で満たされるようにと遣わした。

聖霊は、このように人を介して与えられることもある。

パウロにおいては、聖霊に満たされている状態とは、生きて働くキリストの内に置かれていることであった。すでに述べたように、ほかのいかなる聖書に含まれる文書をはるかに越えて、パウロが「キリストの内にいる、主の内にいる」という表現を実に多くつかっていること、それはつねに霊なるキリストの内に生きていたことを示すものである。

キリストの内にあるのであるから、キリストとは霊的につねに深い出会いの状態を保っていたということになる。

キリスト以降の人間のうちで、使徒パウロが最もキリストを不断に見つめ続け、また復活した主イエスもまた、パウロをつねに深く見つめていたと考えられる。

聖霊を注がれるということそれは霊なるキリストとの深い出会いを意味する。そのことは、さまざまの事を通してなされたことが使徒言行録に記されている。

復活した主イエスは、「約束のものを受けるまで待つていなさい」と弟子たちに命じた。そこで、弟子たち、イエスの母のリアアや他の婦人たちが心を合わせ、一つになって熱心に祈るようになった。そのような共同体の祈りを続けていたときに、神の時がきて人々に聖霊が注がれた。

そして、彼等はみなヨハネによる福音書で預言されていたように、より深い意味において復活のキリストに出会ったのである。

パウロのように、迫害のさなかに突然、キリストの方から光が与えられ、キリストが語りかけることによつて出会いを与えられた者もいるが、彼もまた、すでに述べたように、キリストの内にいる。聖霊の内にとどまることによつて、劇的な光と声による出会いの後もずっとキリストと出会い続けていたのである。そしてそれがパウロを比類のない伝道者としたのであった。

このように個人的にも主は来てくださって出会いが与えられることもある。さらに、主の内にあつて生きている人において、さらに深いキリストとの出会いも与えられることは、次のような例にも見るこ

：わたしはエルサレムに帰って来て、神殿で祈っていたとき、我を忘れた状態になり、「主にお会いした。主は言われた。「急げ。すぐエルサレムから出て行け。」」（使徒言行録22の17～18）

「こつした靈的に深い出会いは、別の箇所にも記されている。

：私は、キリストにある一人の人を知っている。その人は十四年前、第三の天にまで引き上げられた。体のままか、体を離れてかは分からない。：彼は樂園にまで引き上げられ、人が口にするのを許されない、言い表しえない言葉を手にした。

(コリント12の2～4より)

「このように、常にキリストの内において靈的にキリストに出会いつつ日々を過ごしている場合でも、さらに、神は特

別に引き上げて異例な出合いを与えることもある。パウロのような常時キリストのうちにあった人でも、そのような経験は、14年間に一度しかなかったのがうかがえる。

キリストに出会うということ、このように、ごくさやかな段階から限りなく奥深いものまであり、それはキリストの御心のままに与えられる。

「こつした靈的に高い段階へと引き上げられて、キリストに出会うというような体験は、求めればだれにでも与えられるというものでなく、パウロですら14年に一度だった。神がとくに与えようとすると人に与えられることがあるのだということである。

使徒ヨハネやパウロほどではないが、後のアウグスチヌス、ダンテ、スペインのテレサ、トマス・ア・ケンピスなどの書いたものには、とくに引き上げられて、キリスト(神)

と出会った経験を記していると思われるものがある。

しかし、そのような特別な例でなくとも、ごくふつうのキリスト者はみな、そうした聖霊であるキリストと出会っているからこそ、神とキリストを信じての人生を送っていくことができるのである。

神をお父様と呼べる人は、みな聖霊を受けている。聖霊によらなくては、目に見えぬ神をそのように最も近い存在として魂が呼びかけることなど到底あり得ないからである。そして聖霊を受けているということとは、すなわち霊なるキリストと出会っているということにほかならない。

「生きるとはキリスト」(フィリピ1の21)というよく知られた言葉がある。言い換えれば、人間として本当に生きるということは、復活のキリストと常に出会いつつ、キリストを見つめつつ生きること

ある。そしてそこから、あらゆるよきもの、永遠の命、力、清さ、美等々を与えられていくというのが、私たちの願うところである。

：主は、わたしたちのために死なれましたが、それは、わたしたちが、目覚めていても眠っていても、主と共に生きるようになるためです。

ですから、あなたがたは、現にそうしているように、励まし合い、お互いの向上に心がけなさい。(テサロニケ5の10～11)

復活の主と出会う、それは一回きりのことでなく、日々与えられることである。目覚めていても眠っていても主とともに生きることができたら、それは常時キリストと出会っていることにほかならない。そして、そこから自分だけが安らかにいるということにと

どまつていないで、他者にその恵みを分かち合うことがさ  
らなる祝福の道であることが、  
このパウロの言葉によって示  
されている。

主は、いのちの泉であるから、  
本当に私たちがこのように目  
覚めていても眠っていても主  
と出会いつつ歩んでいるとき  
には、その泉からの水をいつ  
も飲んでい  
ることにな  
り、そこか  
らまた周囲  
に流れ出て  
いく。



### 共に祈り合うことの重 要性について

祈りというのは、一人でする  
ものだ、と考えて、キリスト  
者となつて何十年にもなるが、  
一度もキリスト集会の人など  
に、「...を、祈ってください」  
と頼んだことも、そのような

気持ちになつたこともないと  
いう人たちが多い。

これには、次のような理由が  
考えられる。

祈りを聞いてくださる神や  
祈りの力に対する不信仰のた  
め。そこから、祈ってもらつ  
てもどうにもなるものでない  
というあきらめ。

自分が抱えている重荷や問  
題の内容がほかの人に言えな  
いようなことだから。祈つて  
もらうためには、自分のわか  
えている問題がある程度話さ  
ないといけないが、自分の悩  
んでいる難しい問題を、他人  
に話す気になれない。

自分自身が、その問題に対  
して、真剣に祈れていないの  
で、他人に祈りを依頼する気  
持ちになれない。

他人に祈つて...などと頼む  
のは、何となく自尊心が許さ  
ない。相手に従属するような  
気がする。祈ってもらわない

といられないような弱い人間  
だと思われたくない。

祈るときには、戸を閉めて  
祈れ、という聖書の言葉があ  
るので、一人で祈るものだと  
思っている。

祈ってもらうことのできる  
相手がいらない。ふだんの交わ  
りがあまりないので、祈つて  
などと言えない。

祈つてと頼んでも、本当に  
真剣に祈ってくれるかどうか  
分からない。

自分はいつも祈っているの  
で、他人に祈ってもらう必要  
はない。

「このような思いに対して、聖  
書はどう言っているだろうか。  
まず、主イエスは、一人で祈  
れということも言われた(マ  
タイ6の6)が、他方次のよ  
うにも言われた。

...また、はっきり言っておく  
が(、)どんな願い事であれ、

あなたがたのうち二人が地上  
で心を一つにして求めるなら、  
わたしの天の父はそれをかな  
えてくださる。

二人または三人がわたしの名  
によって集まるところには、  
わたしもその中にいるのであ  
る。」(マタイ18の18、20)

(\*)「はっきり」と訳されているが、  
イエスが強調されたのは、あいまいでな  
くはっきりといった明瞭性を言っている  
のでなく、原語は、アーメン *amen* で  
あり、真理を言つ、真実に言つという意  
味である。英訳も、「I tell you the  
truth (NW)」。あるいは、Truly I tell  
you (NRS)である。

この聖書の箇所の、後半部  
「二人、三人ともに集まると  
ころに私はいる。」という言  
葉はよく用いられる。しかし、  
この言葉の前に置かれている  
のは、複数の人の祈りの重要  
性である。

一人で祈るより、二人で心を  
一つにして祈ることによつて  
聞いていただける、というの  
である。その後、二人、ま

たは三人が主の名によって集

れた。(ルカ 9の28)

てきたのだろうか。

では、都にとどまっていなさい。(ルカ24の47、49)

まるるところには…と云われて  
いるから、これは、とくに祈  
りと直接に関わっていること  
として教えられたのがわかる。

イエスが十字架にて処刑され  
る前夜に、ゲッセマネにおい  
て深い祈りを捧げたが、その  
ときに弟子たちも共に祈るよ  
うに求められた。

それは、共同の祈りというこ  
との重要性のゆえであった。  
信仰の弱い者も、しっかりし  
た者もともに祈ることが重要  
なのであった。

ここで、高い所からの力とは、  
聖霊のことである。都にとど  
まれというのも、単になにも  
しないでおれ、というのでな  
く、弟子たちが祈りつつ待つ  
ようにとの意味であった。

一人、三人イエスの名によつ  
て イエスを信じ、イエスを

「誘惑に陥らないように、  
目を覚まして祈っていなさい。」

つぎに、聖霊という最大の賜  
物を与えられることにおいて  
も、共同の祈りを重んじられ  
た。聖霊を受けるとは、キリ

そのことは、ルカ福音書の後  
に続いて書かれた使徒言行録  
の最初にしるされている。

がそこにおられる、だから二  
人、三人が心を合わせて祈る  
ときには、そこにおられる主  
が聴いてくださる というこ  
となのである。

主イエスは、山に登って、夜  
通し一人で祈ったということ  
も記されている。(マタイ14  
の23)しかし、この時は、イ  
エスの生涯のうちで、最も厳  
しい霊的な戦いのときであつ  
たゆえに、一人で夜通し祈る  
というのが予想できるところ  
である。しかし、主イエスは、  
あえて弱い弟子たちもともに  
祈ることを求められた。

「また、罪の赦しを得させる  
悔い改めが、その名によつて  
あらゆる国の人々に宣べ伝え  
られる」と。エルサレムから  
始めて、あなたがたはこれら  
のことの証人となる。  
わたしは、父が約束されたも  
のをあなたがたに送る。  
高い所からの力に覆われるま

：イエスは苦難を受けた後、  
ご自分が生きていることを、  
数多くの証拠をもつて使徒た  
ちに示し、四十日にわたつて  
彼らに現れ、神の国について  
話された。  
そして、彼らと食事を共にし  
ていたとき、こう命じられた。  
「エルサレムを離れず、前に  
わたしたちから聞いた、父の約束  
されたものを待ちなさい。  
ヨハネは水で洗礼を授けたが、  
あなたがたは間もなく聖霊に

主イエスが、神と同じ存在で  
あり、罪なき者であること示  
すため、高い山に登ったこと  
があつた。このときも、あえ  
て一人で行かず、3人の弟子  
たちを伴って祈るために行つ  
たと記されている。

ゲッセマネの祈りのときに、  
血のような汗をしたたらせ、  
非常な苦しみのなかで祈られ  
た。そのような霊的な戦いの  
場にどうして弟子たちを伴つ

：また、罪の赦しを得させる  
悔い改めが、その名によつて  
あらゆる国の人々に宣べ伝え  
られる」と。エルサレムから  
始めて、あなたがたはこれら  
のことの証人となる。  
わたしは、父が約束されたも  
のをあなたがたに送る。  
高い所からの力に覆われるま

：イエスは苦難を受けた後、  
ご自分が生きていることを、  
数多くの証拠をもつて使徒た  
ちに示し、四十日にわたつて  
彼らに現れ、神の国について  
話された。  
そして、彼らと食事を共にし  
ていたとき、こう命じられた。  
「エルサレムを離れず、前に  
わたしたちから聞いた、父の約束  
されたものを待ちなさい。  
ヨハネは水で洗礼を授けたが、  
あなたがたは間もなく聖霊に

…この話をしてから八日ほど  
たったとき、イエスは、ペト  
ロ、ヨハネ、およびヤコブを  
連れて、祈るために山に登ら

ゲッセマネの祈りのときに、  
血のような汗をしたたらせ、  
非常な苦しみのなかで祈られ  
た。そのような霊的な戦いの  
場にどうして弟子たちを伴つ

：また、罪の赦しを得させる  
悔い改めが、その名によつて  
あらゆる国の人々に宣べ伝え  
られる」と。エルサレムから  
始めて、あなたがたはこれら  
のことの証人となる。  
わたしは、父が約束されたも  
のをあなたがたに送る。  
高い所からの力に覆われるま

：イエスは苦難を受けた後、  
ご自分が生きていることを、  
数多くの証拠をもつて使徒た  
ちに示し、四十日にわたつて  
彼らに現れ、神の国について  
話された。  
そして、彼らと食事を共にし  
ていたとき、こう命じられた。  
「エルサレムを離れず、前に  
わたしたちから聞いた、父の約束  
されたものを待ちなさい。  
ヨハネは水で洗礼を授けたが、  
あなたがたは間もなく聖霊に



よる洗礼を授けられるからである。」(使徒言行録1の3〜5)

「このでも、主は「約束されたものを待ちなさい」と言われているが、それは聖霊のことである。聖霊という最も重要なものを受けるためには、祈って待ち続けよ、と使徒たちに言われたのである。

そして弟子たちは、そのイエスの言葉にしたがった。

使徒たち、ほかの婦人たち、イエスの母マリヤたちも心を合わせて熱心に祈っていた。」(使徒言行録1の14)と記されている。

このようにして、共に祈り続けていたが、時至って、主の約束のとおり聖霊が豊かに注がれた。それによって初めて弟子たちは、まったく新たな力を受けてキリストの復活、そして十字架による罪の赦しの福音を宣べ伝えはじめ

るようになった。

私たちが注目させられるのは、最大の賜物としての聖霊がもっとも豊かに与えられたのも、複数の人たちが真剣に、心を一つにして祈りを続けた結果として与えられたということである。

このような複数の人たちの祈りの重要性は、パウロも述べている。

兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストによって、また、「霊」が与えてくださる愛によってお願いします。どうか、わたしのために、わたしと一緒に神に熱心に祈ってください。

わたしがユダヤにいる不信の者たちから守られ、エルサレムに対するわたしの奉仕が聖徒たちに歓迎されるように、

(ローマ15の30〜31)

(\*)「熱心に」と訳されている原語は、シユナゴニアマイであり、この語は(syn シン agonizmai アゴニゾマイ)でシンという接頭語は「共に」を意味し、アゴニゾマイは、「戦う」というのもともとの意味であったから、このパウロの言葉は、「祈りにおいて共に戦っている」というニュアンスを持っている。

このように、エルサレムにギリシア地方からの援助を携えてエルサレムに行くということとは、パウロの命にかかわるような危険なことであること

をパウロは知っていた。そうした困難な旅に出向くときに、彼はローマの信徒たちにも祈ってほしいと懇願している。

それは、主イエス・キリストによって、また聖霊が与える愛によってお願いする…という特別に心を込めた表現となっていて、これはいかにパウロがこの問題を重要視していたかを示すものである。

パウロは、きわめて高い段階にまで引き上げられて語るこ

とのできない声を聞いたし、新約聖書の相当部分が彼が受けた啓示を記しているというほかに類のない使徒であった。それほど聖霊をゆたかに受けていたということである。

それにもかかわらず、否それだからこそ、他者の真実な祈りの重要性を深く悟っていたのである。

パウロが、「私たちは祈りのたびごとに…」と述べて、彼も含めた複数の人たちが、他者の人たちのことをともに祈っていることを記している。

わたしたちは、祈りの度に、あなたがたのことを思い起こして、あなたがた一同のことをいつも神に感謝しています。

(テサロニケ1の2)

さらに、パウロの最大の使命であった福音を語ることににおいても、自分だけが祈っていたらよいというのでなく、信徒たちの祈りの援助をも求め





ている。

…また、わたしが適切な言葉を用いて話し、福音の神秘を大胆に示すことができるように、わたしのためにも祈ってください。

私はこの福音の使者として鎖につながれていますが、それでも、語るべきことは、大胆に話せるように、祈ってください。(エペソ6の19、20)

このように、繰り返し、福音を力強く伝えるために、信徒の祈りの助けの必要を訴えている。

「こつしたことは、キリストを信じる人の集りは「キリストのからだである」と言われていることから導かれる。

信徒の集りがキリストのからだである、ということはふつうの考え方では理解しがたいことである。しかし、これは共同体がいかに重要であるか

を指し示す言葉なのである。

私たちは自分の体の一部が傷ついて痛むなら、全身でその痛みを感じ、また耐える。また、何かで喜ばしいことがあれば心身ともに喜ぶ。同様に、信徒の集りで誰かが苦しみ痛みを感じているなら、ほかの信徒もその痛みや悲しみをともに苦しみ、悲しむ。それが、キリストのからだであるということになる。

…一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶ。

あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。(コリント12の26、27)

「こつした状態があるべき姿であるならば、ある人が苦しい問題を抱えているならば、ほかの信徒もともにそれを少し

でも担ってともに祈りに覚えあうのが当然あるべき状態となる。

共に、祈られ祈るということは、このように、福音書の主イエスの言葉や使徒パウロの言葉などからも、聖書の指し示す姿であるというのがわかる。

そのような祈り合つことによつて、そこに聖霊が注がれて新たな力や導きをそれぞれが与えらるるのを信じていることができる。



### 約束の地を受け継ぐ

詩篇37篇

悪事を謀る者のことであらう不正を行う者をうつらやむな。

彼らは草のように瞬く間に枯れる。

青草のようにすぐにしおれる。(1、2節)

主に信頼し、善を行え。この地に住み着き、信仰を糧とせよ。

主に自らをゆだねよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。

あなたの道を主にまかせよ。信頼せよ、主は計らい

あなたの正しさを光のように(6)

あなたのための裁きを真昼の光のように輝かせてくださる。

「この詩では、まず最初に、「悪を行う者のことであらうだつな」とある。私たちは、絶えず、政治や社会で起こる出来事に、不満や批判、あるいは怒りを持っていると言えるだろう。それは、この詩篇で

言われているように、いまから数千年も昔から変わることがない。

政治でも悪を行う者は多くいるが、腹を立てたところどころにかなることでもないので、私たちにできることは、必ず悪の力や不正は枯れ、滅びる時が来るといふ確信をまず持つことである。それからそれぞれの与えられた場でできることをするということである。

この確信がなかったら、目に見える現象は悪いものが打ち勝つたりするので、すぐ動揺してしまつて自分自身が沈んでいく。だからさまざま問題をしっかりと見た上で揺るがされないためには、悪の力は必ず草のように枯れるのだといふ確信を持つことで、また聖書はいつもそれを与えようとしている。

そのような確信に満ちているといふ点においても、ほかのいかなる書物も聖書にははる

かに遠く及ばない。人間が書いたもの 評論や小説、意見、解説等々はみなこうした悪の最終的結末ということには全くといってよいほど触れていない。

詩篇もその第一篇から、こうした善(神)の力の勝利と、悪の力の滅びとがはっきりと記されている。

ああ、幸いだ。…

主の教えを愛しその教えを昼も夜も口ずさむ人。

その人は流れのほとりに植えられた木。

ときが巡り来れば実を結び葉もしおれることがない。

神に逆らう者はそうではない。彼は風に吹き飛ばされるもみ殻。

神に逆らう者の道は滅びに至る。(詩篇第1篇より)

詩篇37篇のはじめの部分は、このように、詩篇第1篇と本

質的に同じことを歌っているのがわかる。

神を信じるといふことは、このような聖書に記されている神のなさりかたをも信じるといふことを含んでいる。

また「主に自らをゆだねよ。主は心の願いをかなえてくださる。」(4節)とあるが、これは私たちの日々の生活にとつて重要な御言葉である。自分の力でしようと思つたらできない。個人のことにして社会的のことにしても、主にゆだね、主に任せると、必ず主が考えてしてください。

「あなたの正しさを光のように。」(6節)とは、私たちが自身が正しいのではなく、悔い改めていることによつて、神様に義としていただいているといふ点での正しさを意味しており、また、御言葉がその人の内で光り始めるという

状態を表している。

「このように主にゆだねたら、毎日の生活は、神様がさまざま面で導いてくださる。23節にも「主は人の一歩一歩を定めて、道を備えてくださる。」とある。人は倒れても、捨てられるのではない。ということが次にあるが、病氣、苦しみ、事故、大きな罪を犯したりして、周りの人からも捨てられるといふことは起りうるが、人が捨てても神様は支えてくださる。このことは、信仰を続けてきた人みなが経験してきたことであろう。ハンセン病や結核は死の病として恐れられ、一般の人々からも家族からも見捨てられるほどであった。そのような状況においても神を信じた人は主がそうした人々の手をとらえて、引き起こしてください。

老齢になり、家族もいなくなり、周りの人からも忘れられ

てしまうという孤独な状態になっても、そこに神様が来て、手をとらえてくださる。

沈黙して主に向かい、主を待ち焦がれよ。

繁栄の道に行く者や

悪だくみをする者のこと

ら立つな。(7節)

怒りを解き、憤りを捨てよ。

自分も悪事を謀ろうと、

立つてはならない。

悪事を謀る者は断たれ

主に望みをおく人は、地を継ぐ。(9)

しばらくすれば、

主に逆らう者は消え去る

。彼のいた所を調べてみよ、

彼は消え去っている。(10)

貧しい人は地を継ぎ

豊かな平和に自らをゆだねる。

(11節)

この区切りの最初の7節前半

の、「主を待ち焦がれよ」と

いう訳語は、なじみにくい。

これは、次のように他の日本

語訳や海外の次のような訳語がより適切である。

・耐え忍んで主を待て(新改訳)

・耐え忍びて主を待ち望め(口語訳)

英語訳聖書でも、多くは次のように訳されている。

Be still before the LORD

and wait patiently for him;

(21<他) 主の前に静まり、

主を忍耐して待ち望め。

「待ち焦がれる」と訳された原語(フル)は「恐れる、おののく、苦しむ、身もたえする、」という意味にも使わ

れていて、他の訳では「耐え忍べ」となっているものもある。

苦しみの激しいとき、祈つてもなかなか聞かれない、そんな時に、「主の前に静まり、

苦しいと感じるほどに、耐え忍んで主を待て」ということ

である。

地を受け継ぐ者はこの詩篇37篇では、9、11、

22、29、34節にあるように、4回も繰り返す、

「地を継ぐ」という言葉が出てくる。

新共同訳では、「貧しい人は地を継ぎ…」と訳されている。

このように繰り返し言われているのは、聖書全体の中でもこの詩篇だけである。

その中でも11節が有名な山上の教えの中に、

「柔和なものは地を受け継ぐ」という訳で引用されている。

日本語では「柔和な」というのと「貧しい」というのは非常に違った概念で、

「貧しい」といってお金がない、「柔和」といってお金があるうがな

かなく、優しい、穏やかなという意味がある。

どうしてこんなに違うかというところ、

新約聖書を書いた人たちは、旧約聖書の原文であるヘブライ語ではなく、ギリシャ語訳の旧約聖書を用いて、ここから引用しているからである。



元言葉(ヘブル語)は、アーナウであり、これは、「圧迫された」という意味を持つので、「苦しむ、悩む」という意味をもっている。それゆえ、日本語訳でも「苦しむ人」と訳しているのもある。

苦しむ人は、地を受け継ぎ豊かな平和を楽しむ。

(フランススコ会訳)

そして、

圧迫された人はたい

てい、貧しさにつながるので、

「貧しい」と訳しており、

また

圧迫されてもじつと耐えているという意味で「柔和」とも訳される。

このように、旧約聖書の原文であるのへブル語から、そのギリシャ語の プラユース praus になると、柔和なという意味に限定されてしまう。

このように、外国語に翻訳すると当然、その意味は元の言葉よりも、狭くなってしまうことはよくある。(\*)

(\*) 例えば、英語の sweet を日本語では、甘いと訳することが多い。その日本語では、味のごとで砂糖のようなものをまず思い起す。けれども、英語の sweet は次のような意味を持っており、甘いというより、はるかに意味が広くて深い味わいのある言葉である。

甘い(うまい)；味(香り)のよい；新鮮な・気持ちのいい・愉快な；(声・音色が)美しい 調子のいい；親切な 優しい・きれいな かわいらしい……

また柔和というのは、踏まれても踏まれても踏み返さないという風にも訳されたりする。単に優しいということだけでなく、主によって甘んじて受けるといふ心持である。そういう人こそが地を受け継ぐということ

とである。

地を継ぐというのは、神が与えると約束した地を受け継ぐということである。そしてその地とは、乳と蜜の流れる地、とあらわされてきたように、あらゆる良きものが満ちている地だということの意味している。

神から、カナンの地を与える とアブラハムのおかげからずつと言われてきたことだが、その約束されたところを、受け継ぐ、獲得するということがある。

現代の私たちにとっては、イエスが言われた、地を受け継ぐということは、山上の教えの最初にあった「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」であるように、神の国を受けるといふ意味をもっている。

旧約聖書ではカナンという目に見える土地であったが、だんだん歴史とともに霊的な意

味を持つようになり、新約聖書になれば、神の国を受け継ぐということになって新約聖書のみならずこちらにでてくる。

この短い区切りにおいて、「地を継ぐ」という言葉が二回現れる。この詩の作者はとくにこのことに関して主からの啓示を深く受けたと考えられる。

この言葉(表現)の重要性は、この詩篇だけにとどまらない。それは、この言葉(11節)が、新約聖書のなかでも最もよく読まれてきた有名な箇所 山上の教えの中に含まれているからである。

…柔和な人は幸いである。その人たちは、地を受け継ぐ。

(マタイ5の5)

この有名な言葉が、イエスの時代よりはるかに古い時代に書かれた詩篇37の11節からの

引用であるということは、多くの人には知られていない。

それは、訳文が旧約聖書と新約聖書とちがっているからである。

それゆえに、マタイ5章の山上の教えの本来の意味は、引用元の詩篇の意味から考えると、柔和という徳目を持つた人でなく、苦しむ人、何らかの圧迫に悩まされている人、貧しさゆえに苦しんでいる人、というニュアンスを持っているのがわかる。

山上の教えでは、この「柔和の人は幸いだ…」の手前にあるのが、心の貧しき人々であり、悲しむ人々は幸いだ、ということであり、その文脈から考えても、ここは苦しんでいる人、というのが自然なつながりだと言えよう。

じつさい、他の訳では、「耐え忍ぶ人々は、幸いだ。」(共同訳)と訳されている。共同訳とは、新共同訳以前に

新約聖書だけが完成して発売されたものである。しかし、

のちに、旧約聖書と合本になっ

たとき、訳者が変わったため

に、訳語も変更されて現在の

ように「柔和な者は…」となっ

た。しかし、この訳のほう

よりよいということではない。

さらに、これは、山上の教え

では、心の貧しい(心が打ち

砕かれた人)、悲しむ人、義

にうえ濁く人と続くから、そ

の間にあるのは、「柔和」と

いう徳目をあげたのでなく、

苦しんでいる人というのが前

後のつながりにも合っている。

そして、この5節は、悲しむ

人々は幸いだ、という言葉

を補強するために、詩篇から引

用されたのではないかと考

えられている。

そして、この5節の柔和な人

たちというのを除くと、10節

までの「幸いだ」とされてい

る数は、7つとなって祝福さ

れた数となるのはこの見方を

裏付けていると言えよう。

いずれにしても、この詩篇37

篇の11節は、新約聖書の山上

の教えのなかに組み込まれた

ために、とくに知られるよう

になった。新約聖書の訳語は

本来のものとは異なるニュア

ンスとなったが、それはそれ

でこの箇所のアラタな意味の

広がりを感じさせる言葉とも

なった。

旧約聖書において、「地を継

ぐ」のはどのような人であつ

ただろうか。この詩篇では、

さまざまの言葉をもつてあら

わしている。

・ 主に望みをおく人 (主を待

ち望む人) (9節)

・ 貧しい人 (苦しむ人) (11

節)

・ 神の祝福を受けた人 (22節)

・ 主に従う人 正しい人 (29

節) (主に従うと訳された原

語は、ツァッデーク(サッデー

ク)であるから「正しい人」

これらはそれぞれに重要なこ

とであつて、地を継ぐ 神の

約束のものを受け継ぐのは、

当然これら四つのいずれもが

大切なことである。

山上の教えでは、それら四つ

のうち、とくに第2の「苦し

む人、圧迫された人、貧しき

人」を取り上げたのは、主イ

エスご自身が、そうした人た

ちのところに来てくださった

お方であるからだと考えられ

る。

この山上の教えの直後に、イ

エスが山から降りて最初にそ

の神の力をあらわされたのが、

ハンセン病の人に対してであつ

たのを見て、イエスの心の

中心に、苦しむ人、圧迫され

ている人があつたことがうか

がえる。

11節に「豊かな平和に自ら

をゆだねる」とあるが、これ

は平和を受けるということ

である。詩篇の場合、訳語によつ

てかなりニュアンスが変わつ

てくるので、他の訳を参照す

るとより分かり易くなる。

「豊かな平和を味わうことが

できる」、「豊かな平和にあつ

て、喜びを持つ」と訳してい

るものもある。They will take

their delight in peace without

measure.

主に従う人に向かつて

主に逆らう者はたくらみ、牙

をむくが(12)。

主は彼を笑われる。彼に定め

の日が来るのを見ておられる

から。(13)

主に逆らう者は剣を抜き、弓

を引き絞り 貧しい人、乏しい

人を倒そうとし

まっすぐに歩む人を屠ろうと

するが(14)

その剣はかえって自分の胸を

貫き

弓は折れるであらう。(15)

(\*) 「主に従う人」サッデークは、

「正しい、正義の」という意味であり、

名詞のセテク(ツェテク)がその名詞形

で「正義」。それゆえ英語訳はほとんど the righteous と訳している。日本語訳も、悪しき者(口語訳)、悪者(新改訳)と訳している。日本語訳としては、初めて新共同訳が、正しい人と訳さず、主に従う人と訳した。それは聖書的に言えば、正しいとは主に従うことだからという考えからである。

同様に、新共同訳では、ほかのほとんどの英訳が「The wicked(悪しき人)」、日本語訳が「悪しき者」と訳しているのに対し、新共同訳だけが、「主に逆らう人」と訳しているのも同様な理解からであると考えられる。

この箇所においても、悪の心を持つ者は、正しき人(主に従おうとする人)に対して理由なき憎しみをもって攻撃してくるが、彼等の最後は必ず裁かれるという確信がここにある。(13-14節)

こうした確信こそは、聖書が数千年にわたって人々にあたえてきたものであり、聖書が万人の書であり、永遠の書であることと深く結びついている。

この確信は、神の万能とその正義の力を深く実感している者によって生まれ、それは神

に根ざしているゆえに数千年を越えて受け継がれてきたのである。

旧約聖書から続いているこの悪の末路への洞察は、神からの啓示であり、当然のことながら、新約聖書の世界ではさらに深められている。

悪しき人(主に逆らう者)は、武器を持って貧しい人や弱い人を倒そうとするというのは、歴史の中でいつも起こってきたが、その剣はかえって自分の胸を貫くとある。(14、15節)

これは、意味深い言葉である。悪意ある言葉を剣として、相手の心を傷つけようとするとき、そのようなことをすれば、自分自身の魂が、その悪意によって刺され、裁きを受けることになる。そしてそのような悪意ある人の心から善き部分が滅びてしまう。

主イエスが、剣を取って戦お

うとした弟子たちに言われた有名な言葉がある。

…剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。

(マタイ26の52)

この言葉は、戦争を否定する主イエスの言葉としてよく引用されるが、国家間などの戦争だけでなく、個々の人間みならずにはまる霊的な言葉でもある。

悪意の剣、暴言という剣、憎しみという剣…さまざまの相手の心を突き刺すような剣を人間は持っている。ふだんはそれは隠されたようになっていくが、ふとしたときに、そのような剣をもち出して、相手を深く傷つけてしまう。

そしてそれはこのイエスの言葉が鋭く言い当てているように、そのような剣をもち出すものの魂自身が滅びるということなのである。

それとは逆に、キリストから

受けた「いのちの水」を飲むときには、私たちの魂が一つの泉となる。そしてそこからあふれ出るという。そのようなキリストに源をもつ命の水が相手にも及ぶとき、相手の傷ついた魂のいやしともなるであろう。

相手のことを思って心から祈るときには、相手にも自分に対しても良きものが及ぶ。相手がそれを受け取らなければ、平和はあなた方のところに返ってくると言われているように。

(マタイ10の13)

…主に従う人が持っている物はずかでも主に逆らう者、権力ある者の富にまさる。(16節)

これは、五千人のパンの奇跡でも言われているように、わずかなものであっても、イエス様が祝福されたら豊かなものになるということと同様で

ある。

主に従う者(信仰によって正しい者とみなされた人)、その人はたとえ持ち物はわずかであつても、地位や大きな家や財産はなくとも、その小さなものを主が祝福してくださるときには、それは愛と真実の香りを持つているゆえに、広がつていく。人間の持つ愛と称するものは、差別的であり範囲も狭い。それは聖書にいう愛でなく、愛の影にすぎない。

しかし、神に由来する愛を与えられた者は、たとえ弱くこの世で称賛されるような業績はなにもなくとも、不思議なエネルギーをもつていてそのよき影響は周囲に及んでいく。弱いところに神の祝福は豊かに注がれると記されているとおりである。

悪しき者の富は、周囲に災いを引き起し、最終的には何らよいことが生まれず、消えて

いくものでしかない。

… 無垢な人(\*)の生涯を  
主は知つていてくださる。  
彼らとはとこしえに嗣業を持つ。  
:(18)  
神の祝福を受けた人は地を継ぐ。

神の呪いを受けた者は断たれる。  
(22)

「無垢な人」というような日本語表現は今ではほとんど使われない表現である。この原語は、ターミム であり、従来の訳では、全き人 ヨブは全き人であつたと訳されてきた。

「全き人」というのは、主に従おうとする人のことで、主に對して犯した罪を赦してもらつた人もまた「全き人」であると言えよう。

罪多き者であつても、悔い改めて主に向うだけで、その罪はすべて赦される。それは罪

なき者 全き者のようにみなしてくださるといふことである。

そのような人には嗣業、今の私たちには「永遠の命」が与えられる。それは神の国とも言い換えることができる。

神の国、それは神の愛と真実による御支配であり、主の御手のうちに置いていただくことである。

それを与えていただけるので、災いが降りかかつてもうろたえることがない。本当に信仰をもつていたら、さまざまながあつても、立ち直ることが出来る。このように繰り返して悪の力には限界があり、時が来たら必ず滅びるのだということを確認を持つて告げている。

「主に従う人は地を受け継ぐ」(29節)とあるが、「地を受け継ぐ」といふのは新約聖書

では「神の国を受け継ぐ」という意味を持つようになつていった。他方、この現実の世界においても、この地(この世)に実際に、人々の心に励ます者、清い存在として残つていくのも、主に従う人である。

主に望みを置き、主の道を守るとき(34) 現代の私たちにとつてそれは、主イエスの十字架による罪のあがないを信じ、復活のキリストそのものでもある聖霊を絶えず求めて受けていくときを意味する。そのとき、主が私たちをとらえ、祝福を与えてくださる。

…主はあなたを高く上げて地を継がせてくださる。(34節)

「この世の悪はなぜこのようにはびこつているのか、なぜ正義の神がおられるのなら、そのままにしておかれるのか」といふのは、変ることなき疑問



である。

…主に逆らう者が横暴を極め、野生の木のように勢いよくはびこるのをわたしは見た。しかし、時がたてば彼は消えうせ、探しても、見いだすことはできない。(35～36節)

「この確信を私たちもつねに共有したいと思う。主が聖霊を注いでくださるとき、真理をことごとく思い起こさせるといわれているように、こうした悪の末路に関する真理もありありと思い起こさせてくださるであろう。」

個人の場合にかぎらず、悪を成し続けるときにはローマ帝国のような大きな国も、日本の徳川幕府のように、鎖国をし、人権を無視して徹底的に差別をした国も、時が着たら必ず消えていく。

…全き者であろうとつとめ、

まつすぐに見ようとせよ。

平和な人には、未来がある。

(37節)

(\*) 未来と訳された原語アハリートは、後のものという意味なので、一部の訳 日本語訳も「子孫」と訳している。しかし、外国語訳、例えば英訳は、there is a future for the man of peace. (NIV) ある人は、a wonderful future awaits those who love peace. (NLT) 愛する者、未来と訳しているものが多い。

神様に従うものであることとして、まつすぐなものを見ようとするときには、主の平和が与えられ、その主に平和(平安)を持つ人にはいつも未来がある。しかし、主に逆らう者の未来はない。絶たれてしまふ。

「私の平和をあなた方に与えよう」(ヨハネ14の27) 主の平和こそ、主イエスが、最後の夕食のときに、遺言のように語られたことである。

「この詩篇37篇でほかのどの詩篇にも増して強調されている

が、「地を受け継ぐ」ということであつた。そして地を受け継ぐ者はどういう者なのかということが繰り返し記されている。

そしてそのことは、霊的な意味へと深められ、新約聖書にも流れ込んでいる。

それはすでに述べたように、主イエスの有名な言葉、「柔和な者(引用元の詩篇の意味に則して言えば、苦しむ者)は地を受け継ぐ」(マタイ5の5)である。

それ以外の箇所でも、キリスト者が受け継ぐものに言及されているところは多くあるが、一例としてエフェソ信徒への手紙をあげる。

…キリストによって私たちは神の御計画によって約束されたものの相続者とされた。…私たちは、キリストによって

福音を聞き、約束された聖霊で証印を押していただいた。

この聖霊は、私たちが御国を受け継ぐための保障である。

(エペソ書1の11～14より)

聖霊は聖なる風というニュアンスも持つており 創世記巻頭でも、暗闇と混沌の中で霊が動いていたと訳されているが、これは聖なる風 divine wind とも訳されている。

私たちがその御国からの聖なる風を受けたら、それが御国を受け継ぐ保証であると記されている。18節でも、聖なる霊が与えられたら、私たちが受け継ぐものがどれほど豊かなものなのかが分かる。そのように目を開いてくださいというパウロの祈りが書かれています。3章6節でも、神様の大きなご計画は、異邦人であっても約束されたものを受け継ぐということで、新約聖書でもこのように繰り返し言われている。

わたしたちは現実の問題を

いつも見て、どのように動いているか知らなければならぬが、それによって絶えず動揺させられそうになるので、そのときにこそ聖書がある。新しい天と新しい地を受け継ぐという壮大な希望が聖書の最後におかれた黙示録に書かれている。

どんなにこの世に悪があっても、私たちが聖なる霊を豊かに受けるとき、主はすぐに来られるということを実感できるようになるのがうかがえる。

(黙示録22の20)

私たちがその約束を信じて、主よ来てくださいという希望を持ち、必ず悪の力は滅び、輝かしい神の国を受け継ぐことができるということ、いつも胸に思っていて、その福音を伝えていきたいと思う。



## 憲法9条を

### ノーベル平和賞に

憲法9条を持ち続けてきた「日本国民」が先月、今年のノーベル平和賞候補にエントリー(参加登録)された。それは、神奈川県の子供のキリスト者の女性、鷹巣直美さん(7歳と1歳の子供の母親)が昨年送ったメールがきっかけとなった。

女性の敏感な感覚 それは未来の世代を自らのからだに宿し、育てていくということと関わっていると見えよう。今から60年ほど昔、国民的な署名運動となったきつかけも女性から始まった。

1954年3月、北西太平洋ピキニ環礁でアメリカの水爆実験が行なわれ、その際生じた強い放射性物質を静岡の漁船(第五福竜丸)の乗員らが浴びた。死者も出たこの事態

によって、水爆実験禁止への大きなうねりを生じることになった。

東京・杉並の主婦からはじまった水爆実験禁止を求める署名活動は、たちまちのうちに全国に広がり、翌年8月には3000万人を越えるまでに至った。

今回の憲法9条を守るために、1人で始めた運動が去年5月はじめには、2万5000人の署名が集った。憲法といた個人でも団体でもないものは、エントリーの対象にはならないが、団体ならば可能ということで、憲法9条を守ってきた日本国民を対象にということにした。

去年の5月にインターネットで呼びかけると、すぐに多くの反応があり、エントリーのために必要な有識者の推薦も集まった。

(\*)それは、岩村義雄(神戸国際支援機構理事長)、大田正紀(梅花女子大学名誉教授)、勝村弘也(松陰女子学院大学教授)、沢知恵(歌手)、白方誠弥(淀川キリスト教病院名誉院長)、新免貢(宮城学院女子大学教授)、樋口進(関西学院大学教授)、本田哲郎(フランスシソ会司祭)、「釜ヶ崎反失業連絡会共同代表」、水垣渉(京都大学名誉教授)、宮本要太郎(関西大学教授)、久松英二(龍谷大学教授)、光延一郎(上智大学教授神学部長)ほか。

今年2月1日の応募締め切り時点で、大学教授など43人の推薦人と2万4887人の署名が集り、4月9日に、ノーベル委員会から「今年の278件の受賞候補の一つにエントリーされた」とメールがあったという。もちろん受賞というのは多くの参加登録があるからなかなか難しいと思われるが、こうした可能な方法で私たちの意志を現すことが重要なのである。4月末で4万9861人の署名が集まった

という。

なお、団体がノーベル平和賞を受賞したのは、EU(欧州連合)の例がある。冷戦終結後の欧州をまとめようと尽力したためだった。

「憲法9条にノーベル平和賞を」実行委員会の署名サイトは、(<http://oh.nobel.or.jp/>)。署名は、増え続けている。簡単に署名できるので、インターネットを使っている方々は、このサイトを開いてみられることをお勧めします。

なお、この記事は、最初に、東京新聞が「9条にノーベル平和賞を」、「一人の母親の運動広がる」と題して今年の1月3日に大きく取り上げ、ついでクリスチャン新聞が、1月26日号でやはり同じタイトルで取り上げた。さらに、毎日新聞は5月3日の憲法記念日にかんがりのスペースを使って掲載した。

東京新聞は、原発関係でも、すぐれた報道、論評を掲載して、評価が高かったが、今回のことも、正月早々に、写真入りで大きく取り上げるといふ見識を示した。

鷹巣さんたちは、「非戦、非暴力は神様の御心と信じ、戦後、戦争の歯止めとなつていた憲法9条を守り、広め、輝かせたいと祈りつつ、地元

の憲法9条の会の方々といっしょに活動しています。」と語っている。(クリスチャン新聞1月26日号)



「歴史を知らないこと」への、韓国の読者からの返信

前月号に、日本人が、日本が中国や韓国に戦前に何をしてきたか、あまりにも知らないことを記した。

豊臣秀吉に命じられた軍が朝

鮮に攻め入った文禄・慶長の役のことなど書いた小文について、「いのちの水」誌の読者、韓国の具本術氏が、つぎのような記事を寄せて下さった。

最近、御下送の「いのちの水」誌、第638号(16頁)の「歴史を知らないこと」にちなみ、弊地の新聞、朝鮮日報の4月23日の記事を翻訳転記致します。

文禄・慶長の役は、韓国での通称は、「壬辰倭乱・丁酉(ていゆう)倭乱」といい、緒戦の釜山では、隣接の守護城のあつた小都市(東萊トンネ)では、豊臣軍により、軍官民は残らず全滅されました。

その戦乱後、新しく赴任した市長の李安訥(イ・アンノル)が、戦争のあつた4月15日の朝、町中から不意に起こった大いなる哭(声)をあげて泣くこと)の声に驚き、綴った詩

(題は「4月15日」)があります。

「父がその子のために哭し、子が父のために哭をなす。

祖父が孫のために哭し、孫が祖父のために哭する。

母が娘のために哭し、娘が母のために哭する。

妻が夫のために哭し、夫が妻のために哭す。

兄弟や姉妹の別なく、生きている者は、みな哭した。

額に皺を寄せて聴きいつていたが、涙をとめどもなく流していた。

そのとき、下役の一人が述べるには、

哭する家族でも残っていたら、まだその悲しみは深くはない。

白刃のもとで全家族ごとく失われ、哭する者もない数もあまたに(たくさん)ある。

具本術氏は、この詩の原文を添えて、それに「自身の訳を

付けて送ってください。 (一部わかりやすい表現にした箇所がある)

この朝鮮での戦争で、秀吉の武將たちは、朝鮮の軍、民の鼻、耳を削ぎ落とし、持ち帰った。それが埋められて塚とされたのが今日も京都市に残っている。東山区の豊国神社門前にある鼻塚(耳塚)。二万人分の鼻などが埋められているという。

このような異様なものが、現在まで残されているが、それは秀吉が、中国(明)までも支配しようとした結果生まれた悲劇であった。

たった一人の人間の欲望から、何十万という人たちの苦しみや悲しみ、人生の破壊が生じてしまう。

また、こうした戦争にはこのようなおびただしい人たちの命が失われるが、死なないまでも、病気や足や体を大きく傷つけられ障がい者となり、

生涯を破壊された人たち、さらに、そうした何万、何十万という兵士たちのおびただしい食糧は、いかにして調達したのか、それらは多くが周辺の農家など民家からの略奪に頼ることになる。そうした行為によって人々は食糧を奪われ、また抵抗すれば暴行されて、ひどい目に遇わされる。

周辺の村や町などがどれほどの苦しみを受けたか計り知れない。

こうした残酷なことは、戦争となると至るところで行なわれてしまう。文禄・慶長の役において、それぞれの戦争に15万人前後が送り込まれた。そして朝鮮の人たちの犠牲は数十万人と言われている。

戦争は、大規模な殺人、強盗、略奪、破壊…等々ありとあらゆる悪行の合体したものだ。

それは、その一つをやれば、重い罪とされることであるが、戦争となると大規模にそのよ

うな大罪を犯すほどかえって英雄的にもてはやされるといふ異常な事態となる。

武力による戦争を決してすべきでないというのはこうした点から言えることであり、現在の日本が、集団的自衛権を行使することができるようにしようとしているが、そうしたことは、とくにアメリカが引き起こした戦争に日本も加わることになり、そこから相手国が日本に武力攻撃を加えるということが考えられる。

そうなると防衛のためとして更なる攻撃をし、相手も反撃してくる。その果てはどうなるのか。ことに核を持つたり、ミサイル攻撃をすることができきる状況にあれば、それが日本の狭い国土に、しかも大都市から200キロ前後のところに多数の原発がある状況で、他国からのミサイルなどが打ち込まれたらどうなるのか。以

前には想定されたこともない危険な状況に直面することになる。

日本の現在の指導者や、自民党の多数の人たちはこうした危険性が見えないのである。

憲法9条という歴史的にも特別な意義を持ち、その根底に聖書の考え方が息づいている平和主義の精神が守られるようにと願ってやまない。



### 便利さと危険性

自動車は便利である。しかし、それによって数々の事故が生じ、人命が失われ、手足に損傷をうけて障がい者となる被害もおびただしく生じるようになった。

トンネルなどの工事のために、

ダイナマイトは著しく効率よく岩盤を爆破することができようになり、便利になった。しかし、それらを応用して、おびただしい爆弾が造られ、それによって大戦争に用いられ、何千万という人命が失われるようになった。

空を飛び飛行物体は飛行機として長距離を短時間でいける便利さを生んだ。しかし、それらから派生したロケットなどで、核兵器を搭載して外国への攻撃をすると、それが原発の攻撃に用いられたりすると、日本は、場合によっては東京や、大阪、名古屋などの大都市が、放射能のために住めなくなり、壊滅的な打撃を受けるし、これまでのような大都市の火災とかでは到底おさまらず、何十年もの期間、放射性廃棄物で悩まされることになる。

犯罪や誘惑、事件、汚れた内容の数々の番組等々、そんなものを子細に見せても、悪の力の大きさを知らせるばかりであるし、とくに子ども、青年たちには将来にわたって魂を汚すことになるようなものはらんしている。

コンピュータ関連の機器も同様である。通信などにはきわめて便利だという反面、以前では想像もできなかったような数々の犯罪、悪事がコンピュータや関連の機器によってなされるようになってしまった。

たった一発の爆弾で、数百万の大都市を壊滅させる核爆弾、しかもかつてのように、何十万という兵力を敵地に運んで犠牲者をだすのでなく、ミサイルを使って打ち込んだらよいのだからとても便利だということになる。大量殺人にほかならない戦争のために、ついに人類は究極の「便利」なものを生み出してしまった。

胞関連のことが、莫大な研究費を投入して研究されている。特別な病気や障がいが出るようになるかも知れないといった希望的なことが言われているが果たしてそうだろうか。かつての原子核の研究のように、そこから人類を滅ぼす悪魔的な原水爆が造られてしまったが、現在の生物に関するこうした研究がいかなる害悪をもたらす可能性があるか、ほとんど言われようとしていない。

そのことを知って、私たちはこつした急激な科学技術の発達に何らかのブレーキをかけ、あるいはそこから転換し、目に見えるものでなく、資源も要らず、競争もなく、害悪もない、しかも、無尽蔵の富がある世界 目には見えない世界からの利益をより多くくみ取る生活へと重点を置き換えていかねばならないと思われる。

だが、科学技術というものは、その歴史をみればわかるように、必ず大いなる便利さとは裏腹に、危険な害悪をも生み出してきたのである。

日本のような地震、火山国において、原発はすでに、廃止という強力なブレーキかけねばならないというのは多くの人の願いとなっている。

このような便利さと、経済金儲けを至上の目的とする現在の人類の方向性は、必ず破綻に陥るときが来る。

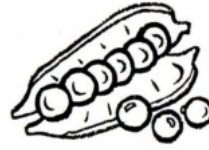
聖書はすでに、命の木の実を食べ、あるいは命の水を飲むことによって、今後生じる可能性の高い困難な状況 プレーキき効かないような状況 においても、そうした一切の死にいたる病から逃れることを告げている。

神の言葉(聖書)が、数千年前から、驚くべき洞察をもって告げていたように、神の命の木の実でなく、「知識の実」のみを食べようとするときには、死に至るといふことなのである。

私が与える水を飲むものは、その人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る。



(ヨハネ11の26、4の14)  
この聖書の単純な、しかし無限に深い意味が込められた言葉が、現在から未来にわたって、私たちすべてに永遠の霊的プレゼントとして与えられているのである。



## ことば

(361) 絶えず祈る

(テサロニケ5の17)

絶えず祈る これは、神に向って祈っている霊の姿勢である。上を仰いで祈り求めている姿勢がいつもなければならぬ。この上を仰ぎ見る姿勢は、どんな仕事をしていても、またどこでも、会話のさなかでも、日常的な仕事を考えていてさえも、存在しうる。

(ブルームハルト(\*) 「悩める魂への慰め」31頁)

(\*) ヨハン・クリストフ・ブルームハルト (1805~1880年) ドイツの牧師、神学者。息子のブルームハルトもまた神学者として有名で父子は共に大きな影響を与えた。ヒルティも同時代で、よく引用されている。

・苦しいとき、悲しみのとき、悪く言われるとき時も、常にこの主を見つめる姿勢があれば、私たちは立ち直ることができる。そして物事がうまくいっているとか、ほめられるときでも、傲慢にもならず、みずからのが主の御前にいかに小さきものであるか 心の貧しさにとどまることができ

る。主は霊であるゆえに、私たちの心のどのような状態にあっても 部屋に鍵を閉めていた弟子たちのもとにも入って来られたように そこにともいてくださる。

その主を仰ぎ、見つめて歩みたい。

(362)

忘れないうちに

今きいたこと

見たこと

心に感じたこと

忘れないうちに 消えない内に

主のうるわしいみわざを

賛美する詩をつくる

(水野源三著「わが恵み汝に足れり」18頁)

・私たちの心はすぐに忘れていく。それゆえに、主日礼拝や家庭集会での講話、読んだ本、周囲の自然のたたずまい、新聞やテレビなどで知ったよき言葉：等々を書き留めておく。そしてそれらの一つでも他者にメールやはがきなどで送り、だれかと共有しようとする。そこに新たな祝福が生まれる。

水野源三の詩もみずからは寝たきりで言葉も出せない人だったが、そうして書き留められた詩の数々は、いまも讚美歌

ともなり、歌われ、読まれて多くの人の心に御国の息吹をつたえている。

(363)

内面的進歩には、二つのもの、すなわち、われわれに語りかける声と、その声を聞くことのできる耳とが必要である。

(ヒルティ「眠れぬ夜のために」上2月10日)

## 編集だより

・今月号は、「祈りの友」会の会報第2号の編集と重なったために、時間が十分に取れず、不十分なものですが、主がそれをも福音のために用いてくださいますようにと願っています。

・テロがあちこちで生じるのも、一つには武器弾薬が大量に拡散してしまったからです。

国家間においても、それぞれの国が軍備の拡大をするほど、安全は高まるのでなく、全体

としてみればますます危険な状況になります。

集団的自衛権の行使ができるようにするならば、制限を付けるなどといったも、そのような制限は状況に応じて簡単に変更されてしまう可能性が大きく、他国の戦争に巻き込まれる危険性が高くなります。

憲法9条こそは、日本が世界平和のために今後も貢献できる大切な道です。軍事の協力でなく、そして軍事に要する莫大な費用を、個々の国々の災害や貧困、難民、公害等々に心のこもった援助を多く注ぐことこそ、真の防衛であり、安全につながることです。

来信より

先日は、第40回キリスト教四国集会のDVDを御送付頂き、妻と3日間全部拝見し、大きな恵みと感激を味わいました。

吉村先生と関根先生の講話、石巻の被災者、原光子さんと数名の方々の証言、また、讚美の

数々感激を与えられました。

特に、手話を交えた讚美は圧巻でした。

私達も、主がお導き下さるならともに出席できる日をと願ったことです

北田康広さんご夫妻の讚美演奏が素晴らしかったことと参加者の方々の感話も実によかった。

(関東地方の方)

いのちの水の、「海の上を歩くイエス」。

わたしも、この十数年なんとかこの世の海に飲み込まれずに来られたことを感謝です。本当はもっと、幾度も、また決定的に飲み込まれることがあるだろうと思ったりしたこともありましたが…。不思議なことです。感謝です。

わからないことが霊的にほんの少しでも見えるようになることは、大きなよるこびです。普段、漠然と思ったり、ちよつと気づかされたりすることも、

このようにわかりやすくはつき

りと書いてくださることで、あらためてみ言葉にゆたかに触れ、その深い意味と広がりを知り、じつさいにいのちの水とパンとさせていただくことができると思わされ、本当に、なによりの感謝です。(四国)

毎月の「いのちの水」(併せて「集会だより」も)を読ませて頂いておりますが、聖書の奥深い福音のメッセージを楽しみにして読ませて頂いております。

特に、聖書について、福音について知らない身近な人にメッセージを知らせるための参考にさせていたいております。

私は、専門的な聖書学などの学びはできませんので、大いに喜んでおります。ご健康が守られて、ますます大胆に、御言葉を語り、取りつがれますようにとお祈り申し上げます。(中部地方のYさん)

昨日はじめて 徳島聖書キリ

スト集会のイースター特別集会(4月20日)の模様を聞かせていただきました。

多少聞きづらいつころもありましたが、すべて聞かせていただきました。

素朴な感じで、単なる行事に墮せず、本当に神様への感謝の念が満ち溢れているように思いました。

皆さんそれぞれ主イエス様への真実な愛にあふれていることが伝わってきました。

私も一度徳島県にお伺いして参加させていただき、皆さんにお会いできることを願っています。(関西地方の方)

キリスト教に出会えて、何が一番大事なことなのかを、教えられたことは感謝でございます。信仰の歩みは、遅々としており、神様に見捨てられまいと必死で歩んできたように思いますが、そうではなく、聖霊の力により、導いてくださっているのだと。

「いのちの水」誌で聖霊につい



てよく教えていただき、アーメン、アーメンと心の中で叫んでおりました。(関東の方)

2011年5月、長野県松下道子宅で吉村さんとお会いして以来、神様の導きを感じながら過ごしております。2012年6月から、自宅で妻と二人で、毎週日曜日、家庭での集会を持てるようになり、昨年2013年2月から隔週の日曜日に、離れたところに住んでいる私の両親とともに集会が持てるようになりました。

自宅での二人だけの集会は、吉村さんの聖書講話シリーズの創世記のアブラハムが召されることからはじめ、創世記が終り、現在では出エジプト記20章まで進むことができました。両親との集会では、ルカ福音書の講話を1章からはじめ、現在第30講(ルカ5章)に入るところです。この聖書講話シリーズによって

聖書の学び方の基本を教えてくださいたいです。(中部地方の方)

「いのちの水」誌4月号の詩篇講話において、旧約聖書における「義」の意味について、目が開かされたことなど、多くのことを学ばせていただき心より感謝です。

昨日は、地域の人たちとともに、水田の水路清掃を行い、いよいよ田に水をひき始めました。乾いた土地に水が注ぎ込まれると、急に田が生き活きとしはじめ、「主なる神が土で人を形づくり、命の息を吹きいれられた。人はこうして生きる者となった。」という創世記の記述が思いおこされます。(東北のKさん)

・水田に水をいれると急に田や周囲の状況が命にあふれるようになってくる。そこに創世記の言葉を思いだしたとのこと、農業の仕事でもこの

ようにみ言葉を思いだし、み言葉と重ね合わせて周囲の状況を見ていくこと、それはだれでもそのように求めていけば可能になると思われれます。

### お知らせ



毎年夏に行なわれている、北海道の瀬棚聖書集会について、開催責任者の野中信成さんから、送られてきた案内を貼り付けておきます。

私は、今年で、12回目の参加となります。もう40年にわたって酪農を主体とする農業従事者によって続けられてきたということだけ考えても、神の特別な導きと守りを思います。とくに現在の瀬棚集会に集まっている人たちの内、最初に瀬棚に入植し、長くこの集会をお世話されてきた、生出正実、真知子ご夫妻の支えが大きかったと思われれます。

そして、10年あまり前から、若い人たちがこの集会の世話人となり、導かれています。

とを感謝です。

第41回 北海道瀬棚聖書集会  
主催：瀬棚三愛同志会 協賛  
日本キリスト教利別教会、キリスト教独立伝道会

### 《主題について》

一般に人は自分が正しいというところが前提となり、自分を基準に物事を判断し行動します。しかし、隣国土の国が、また、組織や隣人同士でお互いを認めずに自分の『正しさ』のみを主張し合い色々なところで争いが起きています。

今回、準備するにあたり様々なテーマについて話し合われた中で「赦し」について考え始めた時に初めに出てきたのは、相手を赦す、ということについてでした。しかし、話し合いが進む中で「まず、自分が赦されている存在なのである」ということを思い起こさせられました。このことを日常の中で意識してゆきたいものです。

今年、利別教会の相良牧師が

退任され石橋牧師が招聘されました。気持ちも新たにとも聖書の大きな柱である「赦し」について学びたいと思います。

【主題】「赦し」  
【日時】2014年7月17日(木)  
20:00 集合〜7月20日(日)  
昼食後解散

【場所】北海道久遠郡せたな町瀬棚区共和 農村青少年研修会館

【講師】吉村孝雄 (1945年生まれ、徳島聖書キリスト教会代表)、石橋隆広 (1966年生、今年4月より利別教会牧師)

【会費】一般15,000円 学生10,000円 (部分参加も可能です。泊食費込みで5000円)

〜宿泊費、食費、及び ファームステイ費を含む〜  
【申し込み、問い合わせ先】野中信成宛

Tel/Fax 0137-84-6335  
〒049-4431 北海道久遠郡

せたな町北松山区小倉山731  
E-mail: nobunari@mac.com

【締切】6月30日までにお申し込みください。(寸前でも対応は出来ると思います)

【所持品】聖書、筆記用具、着替え、寝間着、防寒着(夜は冷えます)など  
(聖書は何冊かこちらにもあります。賛美する曲目は印刷して用意いたします。)

【交通】JR函館本線「長万部駅」下車、長万部駅前発函館バス「北松山瀬棚行き」に乗車

約1時間45分程で「瀬棚市街」下車、徒歩15分又はタクシ― 函館駅前発函館バス「快速せたな号」乗車、約3時間半で「瀬棚市街」着

長万部発 8:35、10:54  
12:57、14:29、16:25、19:43  
20:51

なお、この瀬棚聖書集会では、吉村孝雄が4日間のうち、4

回の聖書講話(内一回は、利別教会での主日礼拝講話)、それに加えて子どもたち(その保護者も含め)を対象とした土曜日の学びを担当しています。それらの他に、日本キリスト教団利別教会の牧師による講話が一回あります。

「祈りの友」通信第2号  
1年前にはじめられた新しい「祈りの友」会に加わられた方々は、この4月で100名を越え、この一年を祈りの交流が与えられて感謝でした。

若い方々の多くの協力も得て、「いのちの水」誌の5月号とともに、会員の方々には、会報「祈りの風」第2号をお届けできることになりました。

会員以外の方々も、希望があれば、「祈りの風」をお送りすることが出来ます。B5判、43頁です。費用は、一部送料込みで200円。

また、「祈りの友」の紹介のため、伝道のためなどで、複数部数を希望される方も申し込みください。

徳島聖書キリスト集会所案内

・場所は、徳島市南田宮一丁目1の47 徳島市バス東田宮下車徒歩四分

(一) 主日礼拝 毎日曜午前10時30分  
(二) 夕拝 第一火曜、第三火曜、夜7時30分から 毎月第四火曜日の夕拝は移動夕拝。(場所は、徳島市国府町ののちのさと作業所、吉野川市鴨島町の中川毛、板野郡藍住町の奥住宅、徳島市城南町の熊井宅)です。

第四土曜日の午後二時からの手話と植物、聖書の会、第二水曜日午後一時からの集会在場にて。また家庭集会所は、板野郡北島町の戸川宅(第2、第4の月曜日午後一時よりと第二水曜日七時三十分より)

・海陽集会、海部郡海陽町の講美堂・数度宅(第二火曜日午前十時より)、  
・いのちのさと集会: 徳島市国府町(毎月第一、第三木曜日午後七時三十分より「いのちのさと」作業所)、  
・藍住集会: 第二、第四月曜日の午前十時より板野郡藍住町の美容サロン・ルカ(笠原宅)、徳島市心神町の天宝堂での集会(網野宅): 毎月第二金曜日午後8時、徳島市南島田町の鈴木ハリ治療院での集会: 毎月第一月曜午後3時などで行われています。また祈禱会が月二回あり、毎月一度、徳島

著者・発行人 吉村孝雄 〒七七三〇〇一五 小松島市中田町字西山九一の一四 電話 090-1183-4962 「いのちの水」協力費 一年 五百円(但し負担随意)  
郵便振替口座 〇一六三〇一五五九〇四 加入者名 徳島聖書キリスト集会所 協力費は、郵便振替口座が定額小為替、または普通為替で編集者あてに送ってください。  
(これは、いずれも郵便局で扱っています。) E-mail: pististty@hotmail.com http://pistis.jp FAX 0885-32-3017

